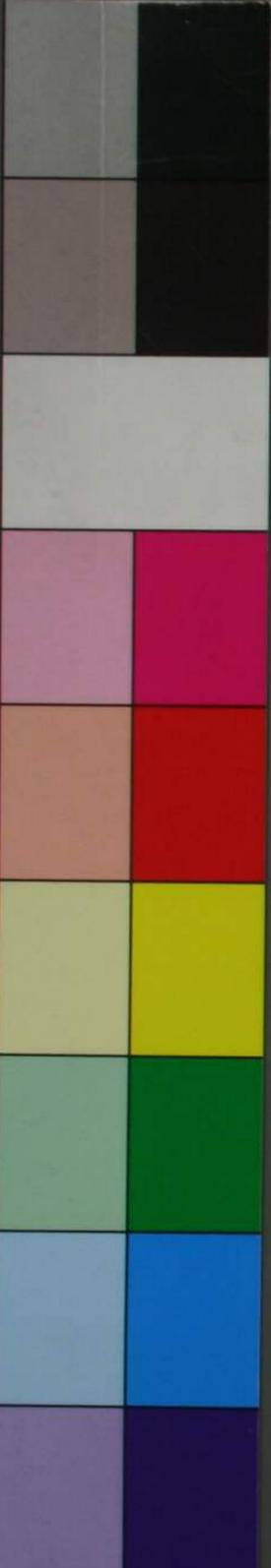
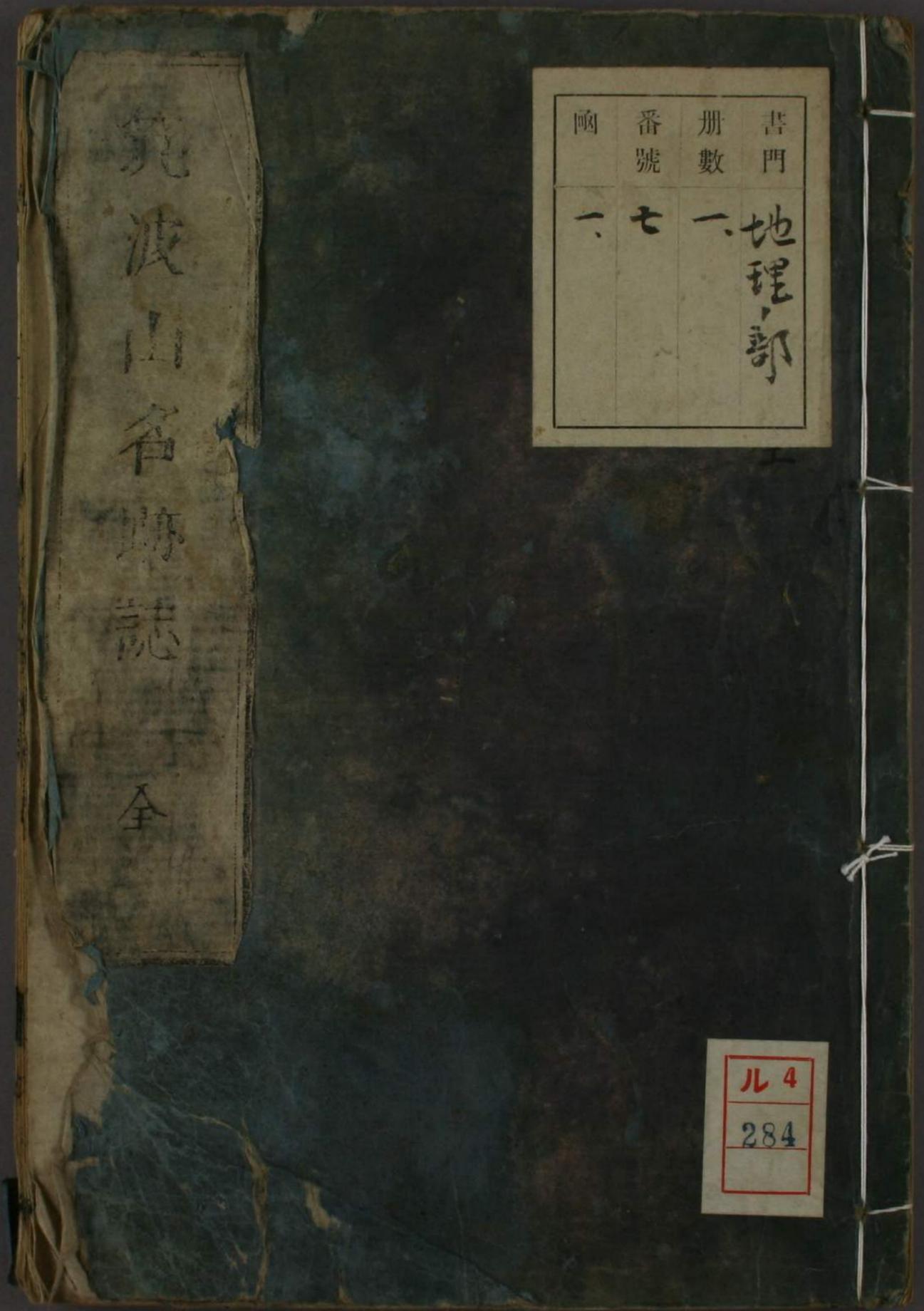


KODAK Color Control Patches
 © The Tiffen Company, 2000
 Kodak LICENSED PRODUCT
 3/Color Black



Centimetres
 A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 B 13 14 15 17 18 19



筑波山名跡誌
 全

函	番 號	冊 數	書 門
一	七	一	地理部

ル 4
 284





門ル名4
號284
卷

奥村
文庫

三島
御前
御印

144



筑波茂陰

意行 田沼主殿頭

はくをいふ乃を

かたもぬ

あふくがき

君のいふの

あがもたすのあや

東都飛鳥山十二景和歌集出

筑波名跡

田沼主殿頭

筑波山名跡誌序

史志此山天地の多岐下まりりりりり東方
 震位此の先小成あるとすれハ或ハ長男山と
 名附峯ハ後名のいれ字乃どく二並小時とのぼる
 陰陽の形勢のり其西を男体山と称す伊弉諾尊
 造りし東を女体山と号す伊弉册尊座一あり
 実ハ益久瓜嶽の原始あり誰け山か詣でらん
 農夫女乃田植疆小も何れ更さひ筑波の山ハ横雲と
 雲の下と我等が元ハ親里なりと。國本の百姓
 久しにせり調あるなり。因此山を連舟の濫觴と。

筑波山名跡誌序

此神と其祖神と崇るるも。二神自凝洲小天降り。
 女神男神と成りぬるを唱和故なり。又日本武尊
 蝦夷と征治小びり。海りよりぬる道は心より甲斐國
 酒折の宮小をり。新治筑波を道ての御連歌のよきは
 宣哉連歌とほくごのたといふとや。その後二條の良基ハ
 筑波同宿を著し。宗祇法師ハ新筑波傳を撰ひり
 殊小松の子とての目を度始り。知足の寺小法師居余
 御代敏常の御祈とく。月次の連歌急るとし。
 筑波已來の音多き中。小松よりある男女川此
 流と急ひ。このかたも小攀階なる者。豈唯此の春

紅葉の秋の夕人惜らくは心ほしむしより。
 世も傳つて誘く記のなと成はれめてせむる人を
 名所とてを道はる。峯み至り攀小びりて根は
 しくつり。愚納。爰小湯を掛るの日は身を波成阿か
 あのびと。遊み筆の終を忘れ。名跡の千が一を誌。
 作はるさ二並の山の枝折とぬるのなり。

安永二癸巳歳春三月

筑波山幻居 上生菴亮盛誌



とも男女川の舟入て船代も通ふ廣き流とるる
筑波山より極乃名所にてまはけ面彼面小気候と
をく望む白雪の如く續古今はくくこの家のこ
らやここの川流て涙とちりばりん人王弟二綏靖帝
乃神宇支那の五臺山巽乃山成割て雲小氣り日本小
飛來る空中にて二片と成り一片は青神山小舟一
筑波山小墜る昔五臺山の禁に二人の民家あり一万
男子と持一方女子と持り其子共成長して互に夫婦
の望めれども親共是を許さざり男はつらひ死むる小
我彼女と云死むるなり彼女も死て死べし必ず同

雨小埋如道と云一かく男女はてして死せり親も歎き
悔も甲斐なく其望小何れ同ト雨小埋然小其墳
より一本の樹生えて枝み枝とるべ葉小葉とる
心小舟小舟り葉えて林とる一其樹の葉流て
川とるる波塚より生えて樹は日本の極乃れは吉野
筑波山小櫓の名所と成をてはもうて涙とるるの御製
をば意とよめるとも也首抄又筑波山二里林小舟水川
とる流り續後葉は流川とるる名を流とるる
神小舟小舟りぬがらぬらりり川は筑波山の神と起
未小舟代の通ふ流とる山南の極川と同トる

筑波山記

一流は坂東太師の水と便小鉦子口より東海小注ぐ也
或は友川とも横川とも不辨里村より船筏とせよ也

●酒香川、又酒匂川とも書逆川とも名悞りたり

筑波杵杵社の中、神酒造の神あり祭神保食
神乃神子豊宇氣比女神也此社の造り為小酒乃
匂り是岩洞より涌出る小酒匂川と名付る也

●蟹養山は蟹新明神の社あり日本養蟹の始とす
酒匂川と流る右れ方小見也筑波炭より三里村の右
所也万葉集はくもこの秋桑眉の衣はりれ君が
スルハあや小きまなり彼縁起曰入至第一神武帝の

所宇此神日向國吾平山小祝也尔後十二代景行帝の

所宇日本武尊東征より小頃東海の激波筑波山の腰を

浸し波濤麻嶋乃浦より流る時小神人船と宗來り

敷日此岳小遊樂りりて一顆の宝玉と照し却其玉登

板輝き流る光乃及雨小蟹と桑とを生む里民收ひ

玉と蟹影明神と崇祀る今之近玉出蟹と者ハ比神

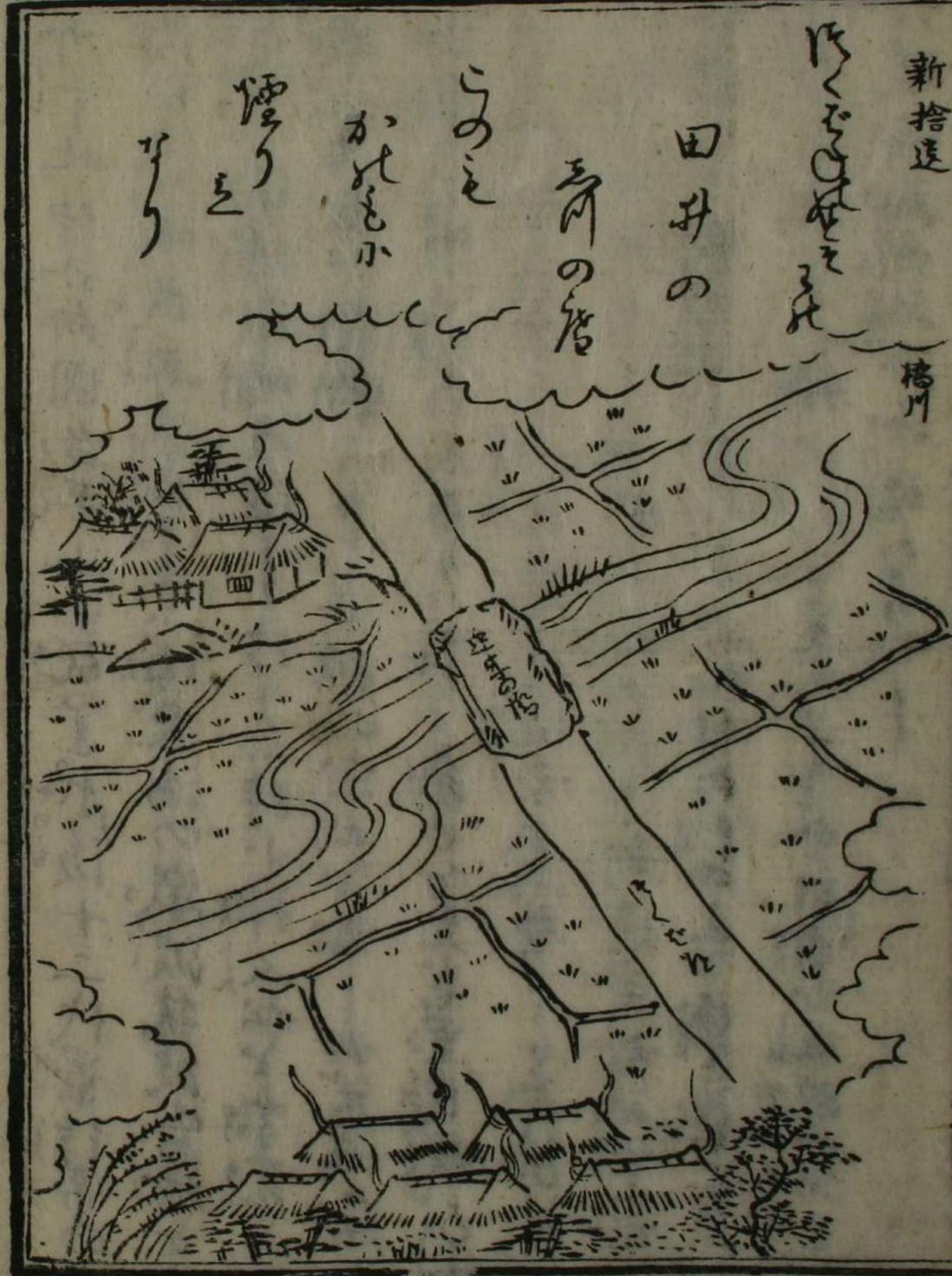
小祈らざるハる一伊弉册尊の神子軒遇突智神垣山姫

と事と種産玉命と産り小此神の比のト小蟹と桑とを

生むと委しく神代卷小見えたり今け岳小出現の宝玉

ハ彼種産玉神の神魂とる一

新捨送



○橋川 迎來橋 能波村耕地の用り川也。

橋ハ此山の名お少とび水東谷より流と流る水氣橋の白あ
 れ。土人橋川と号する也。又古来土人の傳へ能神あり
 ちる小人此山小指である時。神靈凡人の兒と現し。茲小
 来り迎きて慰諭する。運來の橋と名付たり。宗祇法師
 行脚の時。橋小一人の老翁をりて居れば。のちり小老をや
 らしめて。迎ひ来りたり。橋の川と讀られ。宗祇返し。居れば。の
 あらぬ。あらまのこも。小も。迎ひ。百人の。何れ。来りたりと。か
 定來と名。是より山の禁とめ。ぐり。氏屋田地多し。新捨送小
 裾輪の田井の。残の。店と。し。火。白。も。け。遠。也。白井村より。山坂

能波村名此言

峻岨ついでして登のぼる道筋大石多く馬ひま智ちりす

○一大島居の額ハ嵯峨大覚寺宮河添毫こて天地用

離筑波神社の八字はちなりも塔の側わきハ金剛密迹の銅像どうざうあり

一尊いつしゆん立ち故ゆゑハ俗ぞくに筑波の一王いちおうといふ昔むかしは像ざうを造つくる者もの過あやて

口くちと用もちく方かたを先まづ小造せうぞうりふと用もちり方かたと後のちハ一いつ故ゆゑハ障しやう早はや

りて用もち口の像ざう出来できずといふ其故ゆゑハ二神ふたがみ自みづか疑たが測はかハ天降あまくだりり

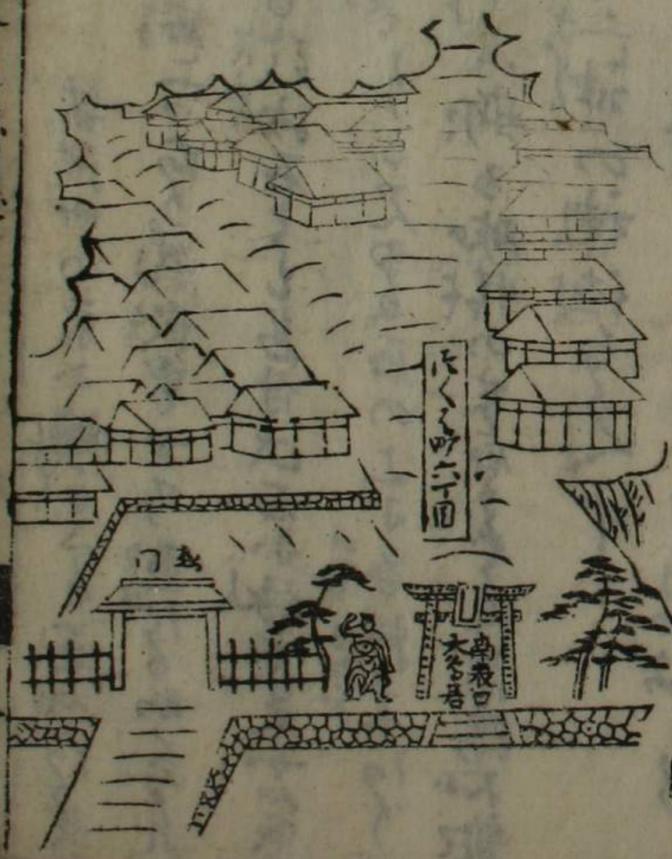
國中くにのちうの柱はしらを巡めぐりり小時せうじ唯ただ神かみ先まづ小せうと発はつしりハ雄神おとがみ祝いほ

ひす改あらため旋まわり命いのちふと當あたハ二神ふたがみの沖おほ流なみ舟ふねられ故ゆゑて流ながる

る方かたと先まづといふ注しゆ古ふるより何なにも成なり就とせどといふ是こゝハ天地

陰陽いんやう秘ひりハの理ことわりり也書經しよきやうの中ちゆうハ牝め雞けい之の晨あした惟ただ家いへ之の索くわく也

とて俗ぞく小せう唯ただを時ときと告つげハ家いへ小せう禍わざはひりといふあれりるべし二王ふたおうと小
おぼし金剛密迹きんかうみつせきの像ざう也元もと二像ふたざうハ陽やうと陰いんといはるからいはるから
ごのち也らハ門かどのち右みぎ小せう安やす並ならむ故ゆゑハ自みづか疑たが二王ふたおうと移うつて
らるか也らハ大おほ島しま居い並ならび筑波つくは所ところハ入い門かどりり也らハ縦たて横よこ民たみ
家いへ旅りよ亭てい多おほし



大島居の御宇

五

○夫女之原 夫女石 筑波西の東小磯の支那の原
 の離附小方六丈の奇石二つあり。其形男女乃並たるやうな
 夫女石とし夫婦石とし立石とし名付以石小依て夫女原
 とし三里の谷に絶頂よりとス。石の上小各標本あり。
 二本おろしと枝と交ぬ。斯る水樹の本石まじり陰陽不離
 の理を説くは是二神の神徳なるべし

○亀之岳 夫女が原北東の方小あり。山の形亀の甲小
 背より少く。亀が岳と名づくは岳著乃各産して一株
 百箇の下小。必と龜ありて負と依て亀が岳と号すと
 一株百箇ハ移小してやうく。丹波北龜山といふと

日本著の名産して易家者流乃伝用とる。その也土人毎
 十月十日の夜をと採り夫女石の上小晒しりし也



夫女之原

一八

河内中津新橋の上意を頼り、あま大坂へ随従し、ま
る河内凱陳の後常任府の
台命より始り白根所

小渡摩堂河内建立次湯嶋天神の北畠小つら。今根生
院の地

元徳の中神田松の外小つら。大い小伽藍所守
立つり別小渡持院といふ寺号、英寺領河内加塔を湯

よ享保二年新焼の後音羽町護國寺隣地へ移し。

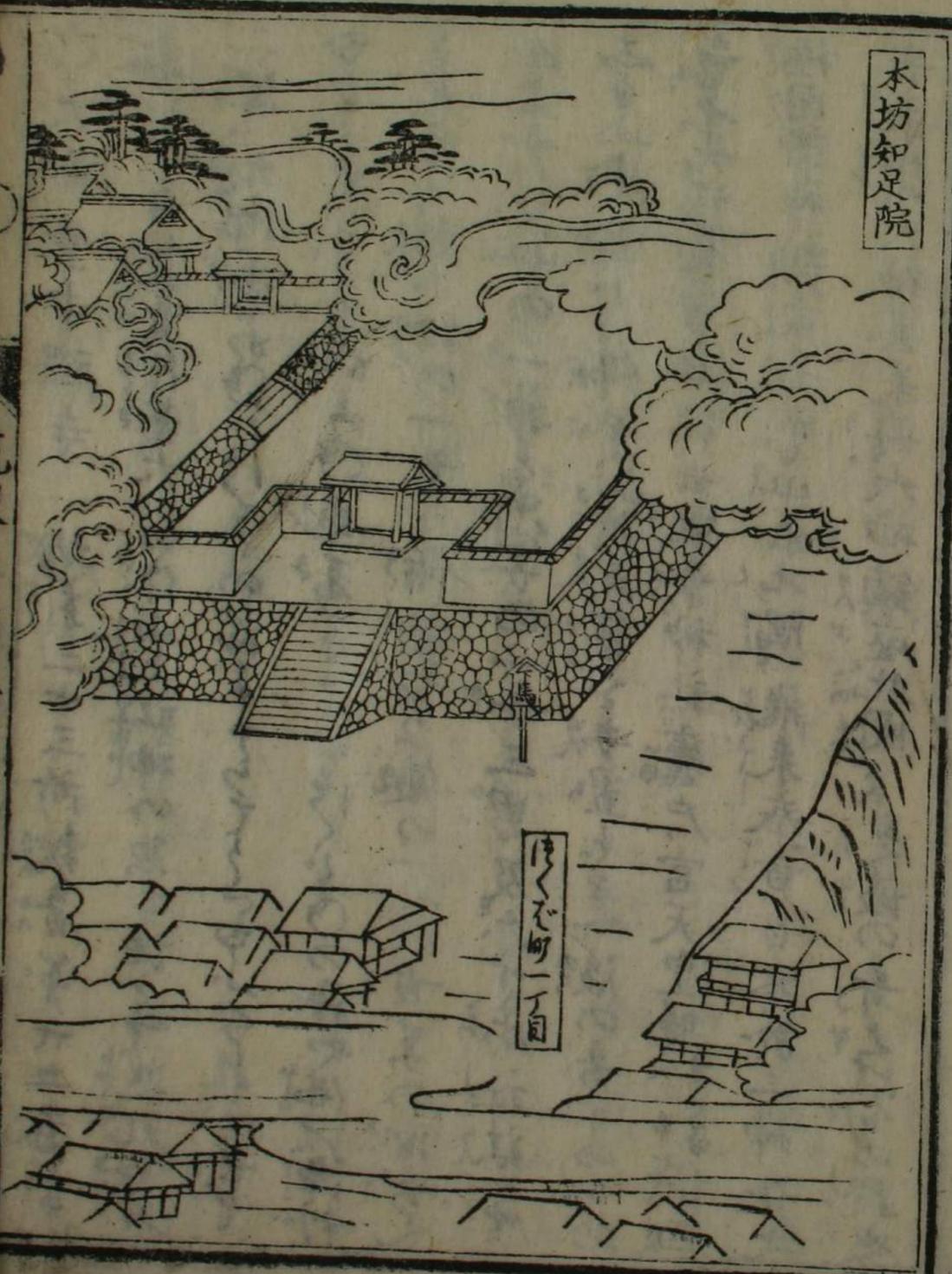
河内新橋殿等河内建立。長日河内新橋千株万歳筑波諸

伽藍等ハ院代の偽守護を稱し、小おいても國家安全

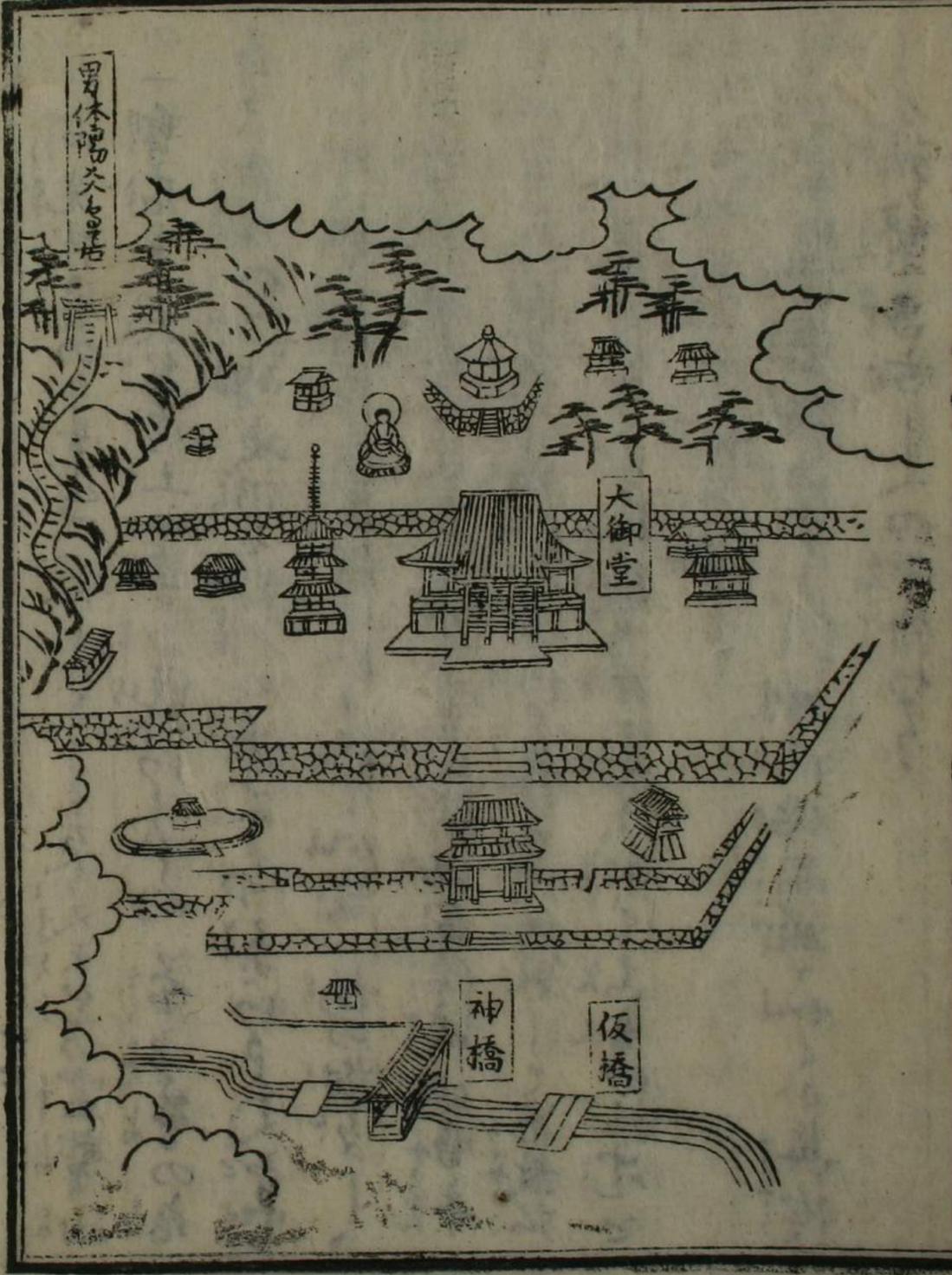
乃河内新橋長日此密供修行月次連号貞川流流

丹精と抽むる所也

本坊知足院



新編 足利藩 御用書



胃休陽火の寺

○ 観流菴

大御堂の西十町余 菴の左右
 小男女川の流と帯と菴号は地景小なる誠小清浄閑寂
 此禪窟なり昔宗祇法師遊杖と止多バ元種玉菴と
 号と宗祇法語云常陸の風小入横川を越てはる
 小男女川のこのむかのみ小男女川とつて谷の遠りる
 乃庵と取きんれは時名の女なるける弥陀の都小首
 を傾け掌と合せ今勅り乃折とて道人のいと結縁
 づるやまのふかば菴の妨りん静小こそと佇らるな
 づる内のおぬとらん小捨る世といひらるる土の上小茅と
 友又茅と礎とり。松の枝と友とくもて佛垣と佛

胃休陽火の寺

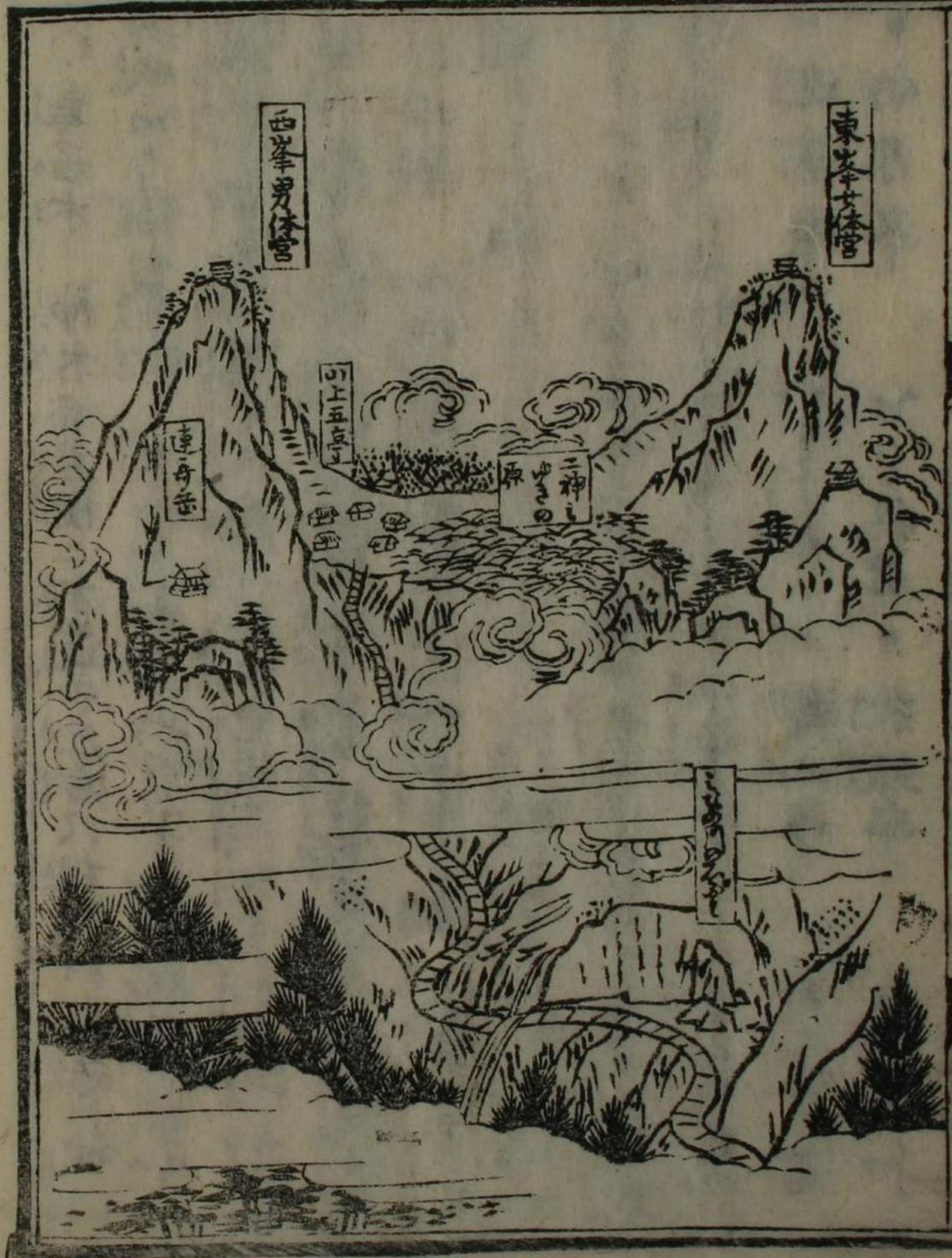
像の前小鉢的の土に志つて火の熾る香炉の傍小籠
瓶小立る櫛乃糸も調子ぶ小流ふる麻の衣小麻此
袈裟の糧の用意と覚一此器もろく石と並べて興
とや。土釜一ツ小き桶小竹の柄板藤の糸小祝と筆
けり書捨つら反古少く尺四其さま入り小むす
いらる人の徳と感一遊さよまや。おく同はやく思ひち
うらして是やくといふ小文小答うく身ぢらうど合掌の
て小さうるられさうりしてせらぶ小けりどけ人此生の
素懐ととげらるさぞら命終も目出度とらるん世小
けりき隠逸の人みらる。身とうたよのり世のほ

うらと毎へて山野小流るといふ。又歌のめき人とえず。
身小近き反古ともなりそられ山居卑下のむとえず
難の戸小すじうひらうとえらるる本の留れ月ぞ就
くうらる。一雨不位のむと覚一くそ松小ぶ小なられ
ば志とふおひらうり真もくおくの心と身元日とお書
けりて一とものきせふられておろけとこしりふの入
おのこの終季ちり此比の身とえくそ。おぎうり河れば泊り
乃破小位とそむお庭の浦と春はられりけりおと揃ず
る小泊りの夜は隠岐のまらう。もうく海山と越来うけ心
小流れ終るうら。史書のらと反古の中小名と見えし

つり。昔主人猥り小神抱と貪り。神不信邪見たり。若祭
礼羣集の中少て次小黒牛とつり。死して又ふとつり。
神哥怖るるなきつり。

○榊塚 是をまて榊の樹多し。日本武尊東征の時。
榊樹小法神の遊樂と見え。仍て新向榊と稱せり。古
記に云えり。今尚も度御祭礼乃日此に神輿と云る其故
実とす。又た小糸袴の諸人禁より小糸と持来り。妹床の
えがしとす。つり。樹下自かろ小石山をり。是、榊
小主人榊塚と号。唐れ五臺山より來り。は、遠りの
山つり。

○千手榊 或神代木もいふ。高數十尺圍三十尺余
昔大御堂火災の時。本尊は木上。末流志す。小糸
此本夜光と枝も枝。くん御の戒。何れ。千手榊と稱とす。
○男女川 此の絶頂小程近く。道と遮る細流あり。二神
此社地の下より出れば。男女川と名付。是、禁小流。てハ
榊川。川の舟。め至りて細れば。遠來の雅人も名所と
知。て越り。峯より。中より。悔じ。もの。こ。これ
と云る。小嶋井。小嘆き。遠く。峯乃。サト。響と。これ
其。や。つり。此。后。と。け。け。り。樹。つ。れ。此。れ。美。ふ。と。の。と
と。い。の。つ。り。



宜るるうやうやりし妹いもうと漱すすきせ乃の神かみ愛いと小こ跡あととと乘のりままふふとと也なり。其その竹たけ集あつ二
 云い男おとこ女むすめほほくくむむ山やま小こ詣よみ来きり。自みづか他たのの男おとこ女むすめおおああひひ小こののああららどどら
 ののいいととくくととららぐぐ也なり。是こゝととかかひひのの祭まつりとといいふふ。古いにしへ一いつハハららうう万まん葉は集あついいとと
 鏡かがみのの石いし鏡かがみ波なみ乃の山やま之の崇たか衣え羽は津つ乃の其その津つ乃の上うへ余あま率ひら而して未な遍ま女むすめ壯さか子こ
 之の往ゆき集あつ加か加か布ふ耀は歌うた尔に云い今いま毎まい年ねん八はち月げつ中ちゆう旬じゆん鏡かがみ波なみ男おとこ女むすめ乃の兒こ
 童どう等らう歌うた舞ぶ狂きやう云い一いつてて神かみ慰なぐさ祭まつりとと行いもも上かみ古いにしへのの真ま実まこととと女むすめへ
 ざざれれどどもも。是こゝ自みづか然たかかひひのの餘あま風かぜ乃のとといいふふ。はは社やしろ地ちよりより西にし北きたへへ下くだりり
 笠かさ間ま加か波なみ山やま日ひ光ひかり
 ホホへへ乃の乃の也なり
 ○立た身み石いし 若わ青せい雲うんのの志こころざしああるる者もの此こゝ神かみ灵たま石いし小こ立た向むかひひ。謹まことでで所ところ
 願ねがのの趣おもひとと演あそべべばば必かならず然た其その感かん應おこりりととををいいふふ。ををいいふふのの義ぎががししるるくく。

阿耨伽小龍其多阿耨伽小龍其多と。按先代舊本紀云亞肖氣アセウキと天の氣と地小降チノキミ。地の氣と天小降アメノキミ。能天地の氣を通ツル和して。あめの生長と司ツカサ。是惟曉星の神徳なりと。爰不知アハレズ此河神徳の人の立身出世とタテマシ。神祇ハ地神チノカミ第三瓊々杵ニギハヤヒ也。伊勢カ少コトハ内宮菟道ウチノミヤウサヂの沙汰サタ也。

○連歌乃嶽 俗ゾクハ小男体乃嶽コオノタマノツツといふ。男体宮の南のそミナミハ小つゝ祭神ハ日本武尊也。人王十二代景行帝の御宇日本武ニギハヤヒ尊ノミコと討治ウチヲシらげ。洛シノへくク。此乃の道ミチハ山ヤマより平ヒラ。其の河折カサマの宮小至コト。珥比ヒ。利菟ツ。玖ク。麻マ。鳩ト。須ス。擬ニ。氏ウヂ。異イ。玖ク。用ヨウ。加カ。祢ネ。菟ウ。流リウ。と。発句ハツク。志シ。流リウ。ハ。兼カミ。燭ソク。舎ヤ。人ヒト。説トク。兒コ。といふ者。並心ナラバシ。而シテ。夜ヨ。下シ。

男射權現 此宮西の峯の絶頂ツツミハ在ア。伊イ。非ヒ。諾ダク。尊ノミコ。法ホウ。志シ。小コ。宮ミヤ。

居坤の方小向イケノマタノコウ 白都 武城の鬼門キモノとト。護ゴ。小コ。晴ハレ。明アカ。

簾ハシ。簾ハシ。云イハレ。二柱ニハしら。神カミ。自ヨリ。高タカ。天アメ。原ノ。天アメ。逆サカ。鉾ノ。差サシ。下ノ。自ヨリ。凝カウ。洲ノ。造ツク。得トク。筑ツク。波ハ。

山ヤマ。落オチ。下ノ。頭カビ。男オノ。体タマ。女メ。体タマ。云イハレ。延ノボ。喜ヨシ。式シキ。神カミ。名ナ。帳チヤウ。曰イハレ。筑ツク。波ハ。郡ノ。二座ニイハ。大オホ。一ヒト。

座イハ。小コ。一ヒト。座イハ。名ナ。神カミ。一ヒト。大オホ。一ヒト。小コ。日ヒ。本ノ。總ソウ。國クニ。風フウ。土ツチ。記キ。云イハレ。人ヒト。王ノ。三ミ。皇ノ。極キョク。天アメ。皇ノ。

二年ニニ。癸ミ。卯ノ。三ミ。月ツキ。筑ツク。波ハ。神カミ。社ヤシロ。奉ホウ。圭キ。田ノ。八ヤチ。十二ニニ。束ツク。始ハジ。行ユク。神カミ。礼レ。也ナリ。

人ヒト。王ノ。四シ。天アメ。武ム。天アメ。皇ノ。三ミ。年トシ。甲カ。戌ノ。五イ。月ツキ。亦モ。奉ホウ。圭キ。田ノ。行ユク。神カミ。礼レ。云イハレ。男オノ。体タマ。宮ミヤ。

の四道シノミチ。小コ。末ノ。社ヤシロ。多オホシ。此地ココ。西南シウナン。北キョク。の眺ノゾミ。をミ。遠トホシ。りナリ。那ナ。下シタ。一ヒト。窺ノゾミ。

てテ。雷ライ。電デン。とト。同ナリ。此ココ。峯ノ。小コ。詣ヨリ。るル。ものハ。仙セン。境ノ。通トス。

の人ヒト。とト。りリ。せセ。小コ。依ヨ。りリ。遊アソ。ぶブ。とト。詠イハ。ふフ。

○來迎谷 古記ハ影向谷と見えたり。用山徳一大士及弘法
大師此谷のより小おいて。釈尊ニ殊普賢の影向を淨せしめ
尔後一遍上人亦佛の影向を淨と親聖聖人榜聖如來寺小
在しと。此山の灵りると云ひしより。同トく爰に佛の影向
を淨しゆと。亦古記の中不見えたり。此谷の峻山
翼ちくくしてハ巖々として。

○常陸帶宮 祭神ハ長道盤神也。神代卷云伊弉諾尊
誓言投帶化一神名之長道盤神是也。此社地躑躅多し。
此木小縁浩びしれば必ず男女の好述りりと。俗折願
しと。備前しと。諾丹乃二神ハ男女の始るれば。

者九夜日干者十日乎と。御製衣の未句と續り。
此故小連奇と筑波の屋といふ。酒折宮ハ甲府の北一里山梨郡酒折村
筑波より凡五十里。事永已冬旅路の火が社事として。兼代ナリ。且以心と連奇
の權真と。兩大檢現と其祖神と崇りといハ神書云二神天
降礙烟島云雄神曰吾者自左。汝者自右。正礼夫は夫婦昆
如斯約東巡行天柱而會逢同也。陽神者進唱曰干於
姁矣珍哉。遇乎可愛少女。又陰神者待和曰干於姁矣珍哉。
遇乎可愛少女。男神代卷是と古今集の序ハ天のうたに
の下ハ女神男神と云ふるをとりて。つらつらと
り又亨徳年中の事と云ふや。筑波檢現旅人の姿と現

ひのきをば系の雲立かかと主人がひのきを置く也。
と云乃旅人も此處とるの茲少く東西の峯と作げハ
引さくぞ外小従身一。絶嶮奇峯自か一匪石の伝と
起一。貴嶺男神威と感せざるいからし。

○諺訪社 祭神ハ大己貴命の沙子。建所名方神也。是

まで男体未社とする。系木岩等に至るまで皆雄威の形
勢なり。自然小男神の伝と顯し。又尔も男体の方へ向也

○鳥居木 神木丈夫の樹二根自然に引居の形を具

一高大枝成まじり均一是も生木の鳥居の迹一也。
是より女体體況の社地小入也。

女躰權現 東の嶽の絶頂小あり。去来冊号法光一あり。以

社地小湿氣なり。自然小流注と流る。社木岩等小
引さく。皆湿順柔弱の摸煥なり。又貝石と称する女形の

后より男体の御石小引さく。

○公羽石 磐筒男神住吉明神黒公羽の形と顯ハ一。神樂と
奏して二神と應なる。神他の面石小化し。傳之香

面の起りハ先代舊本記見えたり。近くハ社況一毛抄ニ出ん也。

○荒雲之嶽 雷神の住る岩洞なり。守座常の未社小
屬也。此岩洞の奥より霧一。是より云風起る時ハ

東の里小雷雨なりといふ。祭神未考。

○大佛石 以石九折大難不也。洪の鎖と掛て往來する
山と下の樹の右の方小高十五六丈の大石を脇より作
ぎえれば海傍の佛形が小向一常の岩山也。此石の邊
小海若くは奇し。この西大佛石と申す所なり。新なり。昔
てと見えなくと。伝流れもきくふりたり。

安座常社 素戔彥雄尊鎮座あり。此社地地震也。
仍て安座常と号す。社乃小室。石乃。未祭
稲田媛と弁方天と禰り。大已貴命と大黒天と祭る。
日本の大黒夫。四月霜月御祭礼の村。一神の神輿は社
大已貴命也。地小入と。神輿行掛りて止り。服道と進み流るふ。これ

日神小仇のふらりと。一神魚測が。一玉のき
残るは怪と怖る。

○大黒石 宝珠之嶽と号す。此嶽の岩山大黒の取
り大已貴命事八咫神と俱小稲羽玉一行り。小時れ
装なり。麻の袋と丸小持右の手ハ腰小あむ。

○北斗石 尖小三角なり。大石なる。十丈余下小三角
乃穴有り。手詰の法人は穴と繋り通る。弘法大師北
斗供と傳一の村。北辰あり。新向ければ。此石と北
斗石と号す。又北辰ハ其所と動かざれば。此嶽地
震り。此嶽りも。地を震り。此嶽ハ神代

大己貴命の子事代主命なり。延喜式も和泉石津神社とあり。高買布立とあり。財福と興る事代主命なり。

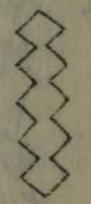
○盤船明神 又ハ祀玉明神と稱す。祭神ハ鳥之岩楠船神ハ神水渡とすと神書ス。又ハ祀地ハ船の形ハ大石ナリ。長十石余大ニ相並テ船艦入遠ハの形ハ儼然出祀入祀トシ。神代卷ハ岩楠船トシ。日本船の始ナリ。社地ハ波の岨ト号ス。又盤船の爰ハ小坂ナリ。自カク神代の故実ト顯レリ。○粟之田井 此岨より遠見の名取ナリ。林トナリ。

里奈の郷小在。万葉集。筑波嶺。登高見者尾花。附付之。田井。雁泣毛。云。新後拾遺。深ナリ。村も亦も。

○景向石 國割石 景向石ハ古諸神ハ石ト示。日本今國の沙汰一ハ。或ハ評定石ト号ス。國割石石の面小日本總國の方敷ト割。縦横大小の引目。然ル。是人トシテ分。日本紀云。人王十三代成務帝五年。殊九月。諸國令。玉郡。其造長ト立。東西ト日縦。南北ト日横。ト。古支紀云。成務帝の時。建内宿禰トシテ。之の塚ト

堅二十間計と鐘、八九間計。其石三方放きて、既小墜るるに
とす。ふられれば、人びとを通りて、ふらふ十、八九急ぐさるれば、
仍て俗に鬼神返し、毎冬度、一りり、林道春の著
し縁起、小筑波山、絶頂、小せり、小一の石門、わら、其家小
所謂阿字門、小して、山、都率の内、院、つれば、諸神、法、佛、等
より出入、する、今、按、ぐる、神武、帝、日向、り、大和、玉、一、し、音
の、晴、玉、の、方、角、道、の、案、内、を、れ、ざ、り、一、以、て、天、照、太、神、の
法、告、り、り、八咫、鳥、と、を、一、導、に、り、一、久、ん、と、乃、一、八咫、鳥、能
多、り、て、先、祖、と、は、い、ち、の、本、身、に、神、皇、産、靈、子、の、御、孫、武、津、見、命
なり。此時、八咫、鳥、盟、て、い、く、日、神、の、在、と、社、に、我、必、と、祈、り、す

まんと、先代旧記、い、不、の、蓋、木、石、蓋、八咫、鳥、の、化、石、り、ん、。

○獨股水  形斯の如き井、泉、り、く。法、り、る、小

漏、り、目、と、病、者、爰、小、洗、ハ、必、痊、る。此、古、弘、法、大、師、禪、居、の、初、修、法
の、關、伽、と、祈、求、し。獸、股、と、持、て、山、を、穿、て、バ、忽、岩、割、り、て、清
泉、と、成、り、此、井、金、色、の、梵、字、浮、び、と、な、れ、バ、梵、字、水、と、も、一、但
梵、字、と、感、見、も、ハ、其、人、小、く、一、。

○叶后 方十間余の岩。龍の蟠る形、而、二、の、穴、り、十、の、字
口の、字、に、似、り、。仍、て、俗、小、叶、后、と、号、も、口、の、形、の、穴、り、潛、り、入、り、
岩、洞、の、神、天、と、稱、し、十、の、字、乃、形、れ、穴、り、り、也、。

○聖天宮 隻身歡喜天の灵穴、也。二柱の神、男女の

道を行く。先、五土を奉り本入ぬと云。吾日本之父母と成る也。陰陽和合の根本の天りれば、社と當山奥之院と出たり也。社、政の事、実ハ筆端に取らざらん也。

○汝呼鐘 社地不在。昔、池宮より山上の六社へ献ぐと云。實に土の精造と云ふこと。團小六軀の形像あり。菩薩の如く天人の如し。傳へい不足。山上六社の本地六観音の形像あり。古の徳の響小。麻路浦より海水激上り、多く人物と溺るといふ。今、奈後林トて撞くと許さども、風土記に所謂、汲上の浦と云ふ。時、海らの水がれり、石りりとも、水の流るる山の名地と云ふ。曉の流の響も、はくどくとも、流るはくどくとも、流るるなり。



○龍燈

此社地のお事なり。毎年五月晦日の夜七巻の流燈
床浦より起り霞段浦を経て小冠峯の岩と
小若の月晦日は社地を通りてり。格（格）莊子云水中有
火焚大槐（火焚大槐）時珍本草云海中陽氣如火焰（和）三才（三才）
云丹後典謝郡海橋立文殊堂前海毎月十六日（丹後）半後
從良方海澳出龍火（從良方）浮寄於堂北邊（正）五九月十六
日夜別一火天降謂之天燈（一）燈又一燈有名伊勢御燈
者堂前有（一）樹之松名御燈松（當山）大持現ハ海山近の父母
○關（關）知井之嶽（知井）尊星水（尊星）當山佛（當山）佛（佛）の用祖德一木士（木士）北斗供
の法と仍（仍）むる時北（北）辰（辰）妙見（妙見）菩薩（菩薩）新向志（新向）又（又）新向の岩

山（山）分（分）ては水（水）涌（涌）出（出）り妙見菩薩と或ハ尊星王ともいふ仍ては
水（水）と尊星水と稱（稱）と（と）北（北）辰（辰）小（小）あり人（人）いふと服（服）を（を）ん（ん）必（必）と
其（其）年の殃災（殃災）と（と）核（核）と也北辰（北辰）五行の精神（五行）を（を）ん（ん）若（若）小（小）降（降）て
人の五臓（五臓）小（小）入（入）又（又）五穀（五穀）草木の中（草木）に入（入）能（能）衛（衛）り能（能）護（護）ひ能（能）守（守）り
南方（南方）の天（天）小（小）次（次）ト（ト）てハ（ハ）南（南）斗（斗）と号（号）。北（北）天（天）小（小）次（次）ト（ト）てハ（ハ）北（北）辰（辰）と
小（小）斗（斗）と号（号）と（と）通（通）く南（南）洲（洲）の（の）元（元）生（生）と利（利）益（益）と（と）宝（宝）鑰（鑰）云（云）南
斗（斗）隨（隨）運（運）北（北）極（極）不（不）移（移）論語（論語）北辰（北辰）居（居）其（其）處（處）衆（衆）星（星）共（共）之（之）矣（矣）北辰（北辰）南
瞻（瞻）部（部）洲（洲）の北（北）天（天）小（小）在（在）て更（更）小（小）他（他）方（方）小（小）移（移）運（運）らむ北（北）斗（斗）儀（儀）軌（軌）云（云）此（此）星
能（能）司（司）善（善）惡（惡）分（分）禍（禍）福（福）若（若）礼（礼）拜（拜）供（供）養（養）者（者）長（長）壽（壽）富（富）貴（貴）不（不）信（信）敬（敬）
者（者）運（運）命（命）不（不）久（久）也

○龍穴 山岩穴麻崎浦不通ト新神往來の所なり。用山徳一太士の
の以後入者。今山岩て洞の半と塞ぐ。此共小波風吹出。腹に染

○陰交華表 此しうやと女社掛といふ。交者字書交也

易卦六爻取交易之義也。此を居、治功和合と表し。故に

交門といふ。今ハ二神の名居とす。故に男神の方と陽爻と

号し。女神の名居と陰爻と稱す。銘曰。言右剛左柔。

印爛一天。予凝八洲。北極星共壽長。東海波

静福徳

○求聞持堂 用山徳一太士弘法大師圓持修行の旧

跡寂靜無比乃禪窟也。今持念者なり。

○經塚 用山徳一太士法花千部書寫し。經と納て塚と築

り。松と植て盟約して曰。千年栄へて千枝と垂と。盟の

めく圍ニ丈余の木本と成。土人足と經掛松といふ。太士は岩

洞不入定の後。数十年を経て廟戸をけ。容貌在世のめく

変じ。不特肉身の正之と示と云。東國言傳は等々。ささり

○枚石 西の峯の下諸木の中。小らる。流木のやど。延らる。

木。未だ石の石。小出と。是。當山の丁奇也。を。これ。枚のめし。

仍て枚石といふなり。

○鳥居枚 女体宮の木のやど。小らる。古木の枚。倒して。其根

榊又生立。一本の大等。く。鳥居のし。

○護摩壇石 高五六丈廣十餘余。中小弘法大師護摩
修行の壇といふ。其嶮峻奇異あり。禿毫の記あり。不
小のくもぞ。又禪定下巻のゆき也。

○黒尊佛 菩薩形の黒岩にて。男体西の峯の根腹あり。
其子細い。かざれども。唯惡き佛と稱して伝ふ。按じら
ん。上六社の物。其地石なり。六字經も六觀音の名字小して。六
字の云即觀音の別号なり。真玄家の傳に。是と黒佛と云ふ
今六觀音合稱の灵石なり。直り哉。黒尊佛といふ也。是
當山所むの灵石なり。常用の着と居る。くも。

○沓衣更祭礼 此神事其始と云ふ。以土人の白礫八王

十二代景行帝の沓衣。日本武尊征夷の沓衣より記す。此

風土記ハ皇極天皇天武天皇の時始と慶長年中
神君沓立願ふ。

江城沓祈禱の神事と成。毎年四月

霜月の朔日。兩大權現の沓祭礼。歳重也。陰陽未復の時
つれ。二神交代の祭といふ。神体の沓衣をもち儀あり。此

沓衣更の沓神更なり。祭礼沓供物。沓礼。毎年

月五日 江城一献。梅夏冬一時の神事。舊事本紀の
記あり。此山の祭礼。往古ハ夏至冬至小約。中古神託あり。
四月。霜月の朔日と定む。中冬望中。此日感齋。改屋。軀穢誠
信。解敬。慎祭。供拂。歳舊氣。遣年。積外。中夏中日。敬

慎為齋祭供如冬善盡慎盡而解年災此日年中祭祀

日也 靴代 木紀

○古岐乃子



斯のやく実の平角ハ天地人小急り葉

の四ツワリハ四季と取と取餘木とかかり実より葉と取と
或ハ羽子の実兒喜之子胡氣子波羽の二実す換後ぐり
正字詳々ぐりど三才會云羽子伊葉者葉似白蒿葉三
月用白花似桔梗花而小六七月結実大如無患子四葉
抽於実珍菓也味不羨入雁汁食之木高八九尺不過
今每久呂之実植羽擬于古岐子也後水尾院新製小園
をのそれ小ハりてこぎのこ乃小ハの月ハこり小をめく

○羽子板



土人の口碑小人の世と知り始の以神懸の再びして兒岐の
実と折花もぐり成ハ初ハ木の柯と取ハ後ハ小板と成て
折花ハ遊ハ羽子と実の板と名付た小ハ葉小ハ板と成り
まの板ハあつと成り也羽子板ハ山ハり成り也
割月取日と羽子板の市と称し病ハ一賣弘り此実
と子也 是羽板 是礼の砌推野山の旅亭小富も其夜一人の
老農其妻も後 苗流の次小ハハ神みりも流
小在して諸神 供小父母の二神と懸ハ羽子と実ハ小ハ
神詠り一二二日と子とをことけり也○の月ハん

よはらう小を免く、ひと古き史をいひ、さうり山をいひ、其
本授と考へず

○岩洞禪定 山内數十箇の禪定所、いづれも嶮岨なる岩
洞あり。岩小、手結と許さる。昔、み月廿五日、六月十四日、廿日
は、三巻目、おと禪定と許す。中古より五、六月の月、おと禪
小禪定せしむり也。洞中少く諸神、諸佛と許さる。故、小禪
此より沐浴、齋戒して、憚む。但、先達の修験者より、九、十
岨の山、小禪の幽深の冥窟、小入と俗小禪定の行といふ。按、
に、さうり山、佛畏の地、さうり山、自々、亦、憚む。心、静、か、り、
六、度、の、中、の、禪、波、羅、蜜、の、ゆ、か、ら、う、宣、り、も、小、禪、定、と、い、ふ、也

○此山多名あり。一者、長男山、是、東方、震位、不當り。最初、小、水、
出る、故、小、二者、築、坡、山、神、武、御、宇、東、海、逆、流、國、中、為、海、延、及、
山下、因、山高、故、能、捍、海波、如、堤、防、然、山西、諸、國、免、魚、
腹、之、難、故、號、築、坡、也。又、昔、時、日、神、乃、慰、諭、父母、二、神、故、
於、山上、彈、筑、至、水、波、曲、鹿、嶋、海、潮、逆、流、渚、著、山、頂、故、名、
著、波、以、筑、音、動、海波、故、又、号、筑、波、也。三者、五、臺、山、唐、
五、臺、山、の、山、列、力、て、絶、た、る、山、の、半、腹、小、か、り、故、小、四、者、天、
竺、山、天、竺、の、諸、神、其、就、山、の、東、北、の、隅、と、割、取、り、
日本、の、二、神、小、賣、と、玉、が、山、小、入、名、其、山、の、山、の、新、衣、と、
恰、も、箕、の、形、小、似、ら、う、箕、ハ、聖、天、の、三、形、小、く、二、神、ハ、波、の、

天の所愛の故小六者栖籠山絶頂小部小奇々る就書住
 故小万葉小部勢の栖籠波の山と云々已上出木途上小記也
 新編別志云波を山と云ハギ登山と云ふも也松と云々も
 常盤の縁り也びとらと云陸と書も山小いなりなりと云
 と云名ハ目ハ見能音なりかを合てき也此一と云也
 東人の語音也云の名小文字と訓と別なりハ大和近江常
 陸也今按けくもと云ハ山の惣名なりと云日本元々海
 なる二神の予れ滴凝て一の洲と成りたりなり波の
 ありあり能く堆くして山と成りたり仍て波小築くも
 なるなり其中小部陸の鏡波山ハ元初小成りたりなり

一所に漲るの名といふべし

○東谷 東光院 日輪院 月輪院 真浄院 花藏院
 釈迦院 三明院 大聖院 壽命院 ○西谷 宝幢院
 宣揚院 大慈院 圓覚院 金剛院 龍泉院 不動院
 晓鐘坊 觀流菴 ○表町・門前町・西山町・東山町
 水戸海道 府中 出見
 ○名所 佐久良川・裾輪田井・男女川・志津川・裳羽岐津
 滴木・芳穂山・登養山彩象・櫛川・近末橋
 龜之岳・支那之原・白波 ○名物付合詞・紀岐之実・羽子板
 檜・著・榎・玄坂木・櫛・紅葉・熊柳
 松茸・蕈菌・岩茸・梅茸・美年州・自然著蕈

- 杜宇トウウ・山名ヤマナ・磐イハ・雁ガン・麻アサ・猿サル・雪ユキ・枝折エダオリ
- 尾オビ・照刺テウシ・岩松イハマツ・菴アン・正木マシキ・木の葉キノハ
- 谷水タニミヅ・白雲シラクモ・月ツキ・瑞山ミズヤマ・茂山モシヤマ・此面ココノオモ・彼面カノオモ
- おひの糸オヒノイト ○此山より四至の出口ハ、南ニ江戸江二十里
- 土浦ツルへ五里イハレ 北より大枝麻呂御子水・東口ヒガシグチ府中フナブチへ五里イハレ・水戸ミヅトへ十二里イハレ・西口ニシグチ
- 水海道ミヅミチ・結城ユツキ等へ出デ・北口キタグチ真壁マシカキへ二里イハレ・兩引フタヒキへ五里イハレ・笠間カサマへ七里イハレ
- 宇津宮ウツミヤへ十二里イハレ・日光山ニツクサへ十八里イハレ

安永八亥歲殊九月

武埜 太原村野頭 校書

筑波山名跡誌 終

同 小泉良栄 画

追加

此書既小成るれ日。或人宗祇の廻國記を身する其との巻
 小此考わり仍て愛小追加して尚故実の洩る事ハ。後
 の君子の考と俟のと。

筑波山ツクハヤマ小結コムス・結ムス・初堂ハツドウやうて紅葉もみぢの蔭かげおとされぬ
 いづれをう源ヒナ・源ヒナと源ヒナト紅葉もみぢの山の今朝けさの雪

筑波山神前ツクハヤマカミマエのて詠うたしてなりなる

さうりやうふ社ヤシロてふはくをのや神カミの面おもてこれに山ヤマ・山ヤマ
 満みみしたに西波ニシハ面おもてと詠うたぜーさうりやう山ヤマくくの紅葉もみぢた
 えん方えんかたをゆきを原ハラをがうすさひなる

ほくふ山あのもかものおまふくに時面もあけにほくふ
みなの川と海はゆるぎなく流るると思ひし
筑波郡のおまふ川らふまの川海よりふき海の色
又山小八重かきこころの靈石のうらまの
来てそ見る紅糸のわーに八重がうね

余前下總の龍崎小玉の時。筑波山の院代と兼職は其向
暇乃日礼也此記と赤穂。故院也歸るの後棄て毎覽せむ。
頃然筑波故久乃緇素等。今此隱住乃蓬子と町き頻み上本
せんまを請ふ。仍と校合念率にて是と興つ考也

武野山記

上生庵亮盛誌

ウズクを
中から

...

...

...

...

...

